

ポピュラー音楽産業における「アルバム」の価値と崩壊 —メディアの変化を通して—

熊倉 光佑

大阪市立大学大学院 文学研究科 文化構想学専攻

表現文化学専修 前期博士課程1年生

Keywords: ポピュラー音楽, アルバム, 音楽産業, メディア

1. はじめに

ポピュラー音楽研究を進める中で「アルバム」が一つの作品として「名盤」という呼称と共に神格化されることがある。複数の楽曲を収録しているにもかかわらず、なぜ「アルバム」はそれ自体一つの作品として扱われるのだろうか。そして、「アルバムの死」と囁かれる今日、その「アルバム」とはいったい何を指しているのだろうか。キース・ニーガスはポピュラー音楽産業には様々な媒介が存在し、生産と消費の間で両者が影響しながらそのサウンドやイメージの配給が行われていると述べる (Negus 2004)。彼は、その媒介を(1)仲介行為としての媒介(2)伝達としての媒介(3)社会関係による媒介という三つに分ける。私は(2)の媒介における録音媒体とその変化に着目しながら、ポピュラー音楽産業の中で「アルバム」がどのように変容していったかを明らかにしたい。

2. 「シングル」と「アルバム」の歴史

「アルバム」は1909年4月、オデオン社がチャイコフスキーの〈くるみ割り人形〉のSPレコード両面版4枚が写真アルバム付きで発売されたのが始まりである。SPレコードは収録時間が短い(片面4分30秒程度)ために分割で複数枚のレコードがセットで売られていた。1948年、コロムビア・レコードが商品化を進めたLPレコードは片面22分ほどの収録時間を可能にした。LPレコードは主にクラシックやミュージカル曲、ヒットソング何曲かを収録した「アルバム」として普及した。対して、ヴィクター社はEPレコード(シングル・レコード)をレコード産業の軸とした。EPレコードはジューク・ボックスで使用され、50年代にはラジオへと移行した。「トップ40ラジオ」などのラジオ番組は商業的役割を持ち、曲が放送に乗ることがレコードの売り上げに繋がった。50年代のポピュラー音楽産業において「シングル」は商業的成功のフォーマットの中で量産されていった。そもそも、この時点ではレコードは生演奏の代用品に過ぎず、「シングル」か「アルバム」かは、主に音楽ジャンル、値段、曲数の違いであったと言える。

3. 「アルバム」の隆起と崩壊

「アルバム」というものそれ自体が一つの作品として注目されたのは1967年、ビートルズによる『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』のリリースが始まりである。レコーディング技術を駆使した先鋭的なこの「アルバム」は、レコードに生演奏の代用品ではなく一つの「作品」としての可能性を与え、「シングル」の売上を凌駕した。それ以降「アルバム」はアーティストの創造性が発揮されたものとして定着し、アルバム全体を通して一貫したテーマを持つ「コンセプト・アルバム」という概念を生み出した。そこから1970年代にかけて、LPレコードが主流の「アルバム」は、ジャケット・デザインも含めた一つの作品として提供され「名盤」と評されるものが生まれる。しかし1980年代にソニーが開発したCDは音楽のデジタル化を促進し、「この技術はやがて「レコード」をCDというデジタル・データの「乗り物」そのものに作り替えて」しまった(増田・谷口2005, p.121)。さらに1999年に登場したナップスターはCD-ROMに使用されていたmp3という音声圧縮ファイルをPCに無料で違法にアップロードし、音楽のファイル共有を流用させた。アメリカではナップスターの登場を境に「アルバム」の売上が衰退の一途を辿る。「アルバム」に収録された曲は個別の楽曲として切り離され、自分の好きな音楽をダウンロードし、プレイリストを制作できる時代になった。

4. 「アルバム」は死んだのか

これら録音媒体の変容は「音楽のつくられ方や配られ方、聴かれ方に独特の影響を与えてきた。」(Negus 2004, p.113)。そして「アルバム」と言うものが一つの作品として語られる背景には、それ自体が音響そのものであり、切り離すことのできないサウンドであったレコードという媒体の存在に今尚依存しているのではないだろうか。「テクノロジーは...その構成要素の一つとして浸透し、素材の地肌を決定する。」(細川 1990, p.272)つまり、レコードからCDへの媒体の変化は「アルバム」という一連のサウンドの構成要素自体を変えてしまったのだ。そして「アルバム」の価値も変化した。「アルバム」は死んだだろうか。榎本は「アルバムは死なない。死んだのは捨て曲だろう。」(榎本 2021, p. 514)と述べている。「捨て曲の死」はテープやCDの登場、音楽のデジタル化と共に兆候を示し、現在では、Apple Musicのトップ100では視聴回数ランキングに、「アルバム」に収録された楽曲が個々にチャートインしている。「アルバム」の曲は独立しそれぞれが評価され始めた。今後さらに様々な媒介の変化が「アルバム」や音楽の意味生産に影響を与えていくことだろう。

5. 参考文献

- ニーガス, キース (Negus, Keith.) 2004『ポピュラー音楽理論入門』安田昌弘訳, 東京: 水声社. (1996 *Popular Music in Theory: An Introduction*, London: Wesleyan University Press.)
- 細川周平, 1990『レコードの美学』東京: 勁草書房.
- 増田聡・谷口文和, 2005『音楽未来形 デジタル時代の音楽文化のゆくえ』東京: 洋泉社.
- 榎本幹朗著, 2021『音楽が未来を連れてくる 時代を創った音楽ビジネス百年の革新者たち』東京: ディスクユニオン